

田原坂

年刊
Tabaruzaka
Vol.8

特集 絵筆が語るドラマ

— 錦絵に見る西南戦争 —

創作・虚構：錦絵が伝える
もうひとつの真実

報道メディアとしての錦絵

西郷の錦絵が語るもう一つの真実

左は全て西郷隆盛の肖像である。右上の大きな絵は、隣家に生まれて幼少期に西郷から可愛がられ、西郷を強く敬慕した肥後直熊の作。没後五〇年祭に際して販売された石版画で、遺族から生前の姿を眼前に見ようだと称されたものである。

明治三十一年造の上野公園の銅像などを見ている現代の我々が持つ西郷のイメージにも近い。

一方、他の小さな絵は、西南戦争当時、錦絵等に描かれた西郷である。いずれも彼のイメージとはかけ離れており、西南戦争の主役でありながら、その容姿に関する情報が全

く知られていなかったことが判る。

多くは立派な髭を蓄え、軍服を着た猛々しい姿であるが、これらは錦絵に親しんだ当時の庶民が持つ維新の英傑・武人としての西郷のイメージを投影したものといえる。

西南戦争の錦絵は、現地を見えない東京や大阪の絵師たちが新聞報道などをもとに想像や脚色を加えて描いたものであり、事実と異なる部分が多い。

とはいえ、それは、もう一つの真実——当時の庶民の心——を伝えてくれる史料でもあるのだ。



* 雄松堂 1975 『THE JAPAN PUNCH 1877-1878』

西南戦争錦絵の流行

「東京名物の一つ」と称された錦絵（木版多色刷り版画）。明治期の新聞には欠けていた視覚情報を補うメディアでもあった。比較的廉価だったこともあろう（大判三枚続きが六銭、現代の約千五百円）、西南戦争の錦絵は人気を博し、六百種が出版されたともいわれる。

確認したところでは、福岡・熊本県の神社の奉納絵馬のなかに錦絵を模したものがあり、地方への浸透とその人気ぶりがうかがわれる。

左の絵馬は「征韓論之図」（楊洲周延）と全く同じ構図である。



▲ 菊池市 水次菅原神社絵馬（明治17年8月奉納）



▲ 「鹿兒島士族熊本安政橋戦争ノ図」永島孟斎
明治10年3月届出



▲ 福岡県大野城市 平野神社絵馬（明治10年9月奉納）



▲「当世珍聞 絵解ばなし 四号」 絵師未記載 明治10年4月11日届出

詩書(説明文)には、熊本城籠城戦のうちの4月8日の突圍戦、続けて届出翌日の4月12日の御船方面の戦いの内容が記されている。出版元がいかに速報性を重視していたかが判る資料である。



明治八年発布の条例により、当時の錦絵は出版前に内務省への届出義務があり、西南戦争の錦絵には原則、届出日が記されている。この届出日を見ると、出来事の発生や報道から間もない時に出版手続きがなされたものが多いことが判る。錦絵は、報道メディアであったから速報性も求められたのである。表題に「鹿児島新聞」と記されたものはその性格を良く示すものといえる。

時間の経過に沿って—その1

▶「絵入新聞別号記載 西郷君暴徒説諭の図」 永島孟斎 明治10年2月16日届出

弾薬庫襲撃などの暴動を受け、2月3日に帰鹿した西郷は、今後の方針について私学校党内で協議した。この時、武力蜂起に否定的であった彼の様子を描いた作である。このことは2月10日付の東京日日新聞附録(号外)で報道されており、鹿児島における風雲急が注視されていたことが判る。



◀「鎮撫 鹿児島新聞」 安達銀光 明治10年2月15日届出

弾薬庫襲撃の報を受け、事態收拾のため海軍大輔川村純義と内務少輔林友幸が急派され、2月9日、海路鹿児島島に到着する。しかし、西郷との面会はかなわず、武力蜂起を思いとどめることはできなかった。本作は、林と桐野利秋の談判の場面で、互いの厳しい表情が緊迫した事態を表している。

▶「鹿児島記事」 大蘇芳年 明治10年3月24日届出

薩摩軍の出陣を描いた錦絵は多い。2月14日、鹿児島では珍しい雪のなか私学校前で閲兵式が催され、後、17日まで順次出陣していく(14～16日は雪天)。本作は、先鋒の第6・7大隊長別府晋介が描かれていることから、14日の模様を描いたものといえる。





▶「薩州鹿兒島 征討記之内 県下ノ兇賊等肥後 熊本旧城下江攻撃シ官軍応戦之図」
大蘇芳年 明治10年3月3日届出

薩摩軍は2月21日に城下に侵攻、2月22日～4月14日にかけては熊本城（熊本鎮台）攻防戦が展開される。

本作は3月3日の届出であることや篠原国幹が描かれていることから、2月22・23日の熊本城総攻撃戦を描いたものとみられる。



◀「鹿兒島征討戦記」
小林清親 明治10年3月22日届出

熊本城攻防戦を描いた錦絵は多く、本作は2月22日の総攻撃初日の場面である。

3月5日付の東京日日新聞「地雷火を以て、賊四、五十人を斃し」などを受けてのものであろう、熊本鎮台が埋置した地雷が効果を発揮した様が強調的に描かれている。



▶「鹿兒島新聞 植木駅戦之図」
安達銀光 明治10年3月2日届出

2月22日夜、植木向坂にて乃木希典率いる政府軍小倉14連隊と薩摩軍とが激突した。この戦いは政府軍が敗勢で軍旗を奪われるという事件もあったが、錦絵の詩書（説明文）にはそのことは触れられておらず、「暴徒ハ兵器を分捕され散々其場を逃去りける」と政府軍勝利が謳われている。



◀「薩肥海 鹿兒島逆徒征討図」
早川松山 明治10年3月8日届出

政府海軍は、2月23日、八代海日奈久沖にて薩摩艦迎陽を拿捕、同日、熊本沖にて舞鶴・野母の2船を破壊して、薩摩軍の兵站能力を早々に奪った。

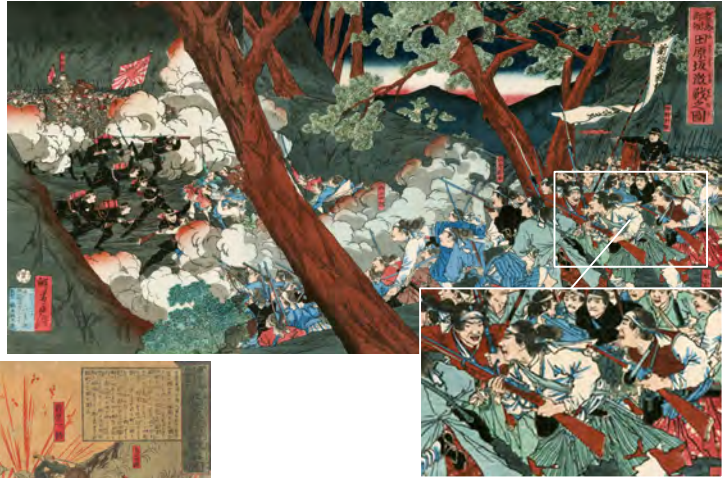
本作はその時の場面を描いたものとみられるが、実際にはこうした白兵戦は無かった。





▶「鹿児島新報 田原坂激戦之図」
鮮斎永濯 明治10年3月届出

3月4日～20日の田原坂の戦いは盛んに新聞報道されており、これを描いた錦絵も多い。本作は、スナイドル銃・銃剣などが忠実に描かれており、それが分かるように（体に隠れてしまわないように）という意図であろう、薩摩兵の小銃の持ち手が逆になっている。絵師のこだわりが伝わる作品である。



▶「鹿児島新聞 二重峠戦争之図」
安達銀光 明治10年4月5日届出

3月18日、薩摩軍と檜垣直枝権少警視率いる豊後口警視隊が、阿蘇二重峠・黒川口にて交戦。この戦いで鬼官兵衛こと佐川1等大警部が戦死する。手前の陣羽織姿は、旧会津藩重臣の中根米七、佐賀県士族で佐賀の乱に参戦した石井竹之助。こうした経歴の人物は好んで描かれる。



◀「鹿児島新聞内 西郷小平討死図」
山崎年信 明治10年4月5日届出

西南戦争の関が原といわれる高瀬の戦い。敗れた薩摩軍はこれより北上することはできず、以後は撤退戦を繰り返すことになる。2月27日、この戦いで薩摩軍第1大隊第1小隊長で西郷の末弟小兵衛が戦死する。本作は被弾した瞬間の場면을印象的に描いている。

◀「鹿児島征討記内 熊本城ヨリ諸所戦争図 第3」
大蘇芳年 明治10年3月16日届出

約1ヶ月に及ぶ山鹿口の戦いのうち、最も激しかった3月12日の第3次戦を描いたもの。届出日は戦いから4日後。速報性が高い作である。

◀「鹿児島戦記」
楊洲周延 明治10年4月12日届出

3月20日～4月14日、田原坂陥落により前線を木留方面に後退した薩摩軍と政府軍は膠着した戦いを続ける。本作は3月25日、第1～第3旅団を主力とする政府軍が、朝霧の晴れとともに攻撃を開始した様子を描いたものである。



◀「川尻河戦争之図」
永島孟齋 明治10年5月11日届出

4月13日、山田顕義少将率いる別働第2旅団を主力とする衝背軍と薩摩軍が熊本城南方の加勢川を挟んで交戦する。
この戦いで薩摩軍は包囲を解き撤退、熊本城救援が果たされた。

▶「日向国 三国峠進撃之図」
山崎年信 明治10年8月15日届出

6月17日、豊後竹田方面の三国峠で野村忍介を主将とする薩摩軍と青山朗・川上操六少佐等が率いる熊本鎮台とが激突。
本作は珍しい6枚続き版で、広い画面にダイナミックに戦闘の様子が描かれている（掲載は右半分）。



◀「鹿児島暴徒降参之図」
大蘇芳年 明治10年9月19日届出

6月16日、政府軍は未だ薩摩軍の威勢盛んな鹿児島大口方面を攻撃、同20日、第2・第3旅団がこれを占領する。
本作に描かれた薩摩軍降兵の有馬雄助（中隊長）や肥後直次・町田孝造等（小隊長・半隊長）は、実際には8月上旬に宮崎で投降、同月下旬に裁判を受けた面々である。

▶「鹿児島間道ヨリ連絡ヲ通ズ 大戦之図」
山崎年信 明治10年7月30日届出

佐敷・大口方面占領後、川路利良少将率いる別働第3旅団は鹿児島への途上の6月24日、入来峠（鹿児島市と薩摩川内市の境）において薩摩軍と交戦。同日、鹿児島に侵攻する。
こうした、やや地味な戦いが錦絵に取上げられたことから人々の戦争への関心の高さがうかがわれる。



◀「西国鎮撫諸將賜=天盃=之図」
楊洲周延 明治10年7月25日届出

7月13日、川路利良少将は帰京して戦況を報告し、内閣・宮内省より酒肴を賜る。
本作は、この新聞報道（7月14日）に脚色を加えて描いたもので、川路のほか、戦地にいるはずの山縣・谷・三浦等諸将が宮中の酒宴に列席している。





▶「鹿児島征討紀聞」

楊洲周延 明治10年8月24日届出

8月6～8日の宮崎美々津方面の戦いでは、政府軍は豪雨で増水した耳川の渡河に苦慮し、食料を届けようとした輜重隊の溺死者も多かった。

工兵が橋を架し、徹夜で筏を造っており、本作にはこの筏での渡河、戦闘が描かれている。



▶「鹿児島県大進撃」

山崎年信 明治10年9月8日届出

9月1日、薩摩軍の私学校突入時、鹿児島駐留の政府軍は寡少であった。急遽、三好重臣少将率いる第2旅団が駆けつけて戦闘におよび、9月3日、市中の過半を制圧する。本作はこの時の戦いを描いたもので、退避した岩村県令は、姿は無いものの名前だけが表記されている。



◀「都の城戦争之図」

楊洲周延 明治10年8月届出

7月24日の都城陥落を描いたもの。

この戦闘で薩摩軍は「紙屋村外ノ山上ニ壘ヲ築キ防守」『征西戦記稿』しているが、都城という地名からの連想であろう、錦絵では立派な近世城郭に拠っている。

◀「暴徒突出軍議図」

楊洲周延 明治10年9月21日届出

延岡方面の戦いに敗れ、政府全軍に包囲された西郷は、8月16日に解散を宣言し、宿所とした俵野（延岡市長井）において包囲線突破と今後の方針について軍議を開く。

この後、薩摩軍は間道を通して政府軍の探索をまぬがれ、9月1日に鹿児島へ戻るのである。

◀「鹿児島賊徒平定図」

梅堂国政 明治10年10月4日届出

戦争の終結となる9月24日の城山の戦い、西郷自決を描いた錦絵は多い。

本作は、西郷の首が飛んで幽霊となった様子が描かれており、これは9月25日付の東京日日新聞「西郷の首なし、探偵中なり」との報道からイマジネーションしたものと考えられる。

西南戦争の錦絵には、同じ戦いの場面を描いたものがある。なかでも熊本城攻防戦・田原坂の戦い・城山の戦いなどの作品は多い。

これら重要な戦局や激戦は、連日のように紙面を割いて報道され、熊本城攻防戦については東京曙新聞で「熊本籠城記」と題した連載記事も組まれたほどであった。

田原坂の戦いを描いた数種の錦絵の届出日には、実際の戦い（三月四〜二十日）から時間を経過した日付もみられ、大判一枚の「鹿児島戦争記事」については半年が経過した九月十四日の届出である。版元・絵師は、情報が古くても売れると見込んだのであろう。田原坂の戦いは、それほど人々の関心を集めていたのである。



▲「鹿児島戦争記事」
山崎年信 明治10年9月14日届出



▲「鹿児島暴徒追討記」
楊洲周延 明治10年3月14日届出

新聞の誤報を受け、誌書（説明文）には、村田新八が田原坂の戦いにて戦死したとある。



▲「鹿児島新聞之内 田原坂進撃之図」
梅堂国政 明治10年3月26日届出

画題は「新聞上にて知られた」ことだと、絵師国政自身が記している「梅堂榮久記」。



▲「鹿児島新画之内 熊本県田原坂撃戦之図」
梅堂国政 明治10年4月5日届出

詞書（説明文）は絵師国政自身が記している「梅堂榮久記」。



▲「田原坂合戦の図」
永島孟斎 明治10年4月5日届出



▲「田原坂の大戦争」
永島孟斎 明治10年5月17日届出
詞書（説明文）に薩摩軍が「人形の斗策」用いたとあり、兵士に擬した藁人形が描かれている。



◀「征韓論之図」

楊洲周延 明治10年8月22日届出

征韓論政変は明治6年の出来事であるが、これを描いた錦絵数種が、西南戦争当時にも出版されている。

政変により西郷が大久保と決裂、下野したことが戦争の遠因となったことから、改めて注目されたのであろう。

▶「明治十年二月中旬鹿児島暴徒 出陣之図」
石塚寧斎 明治10年8月18日届出

薩摩軍出陣についても人々の関心が高かったのであろう、これを描いた錦絵が数種ある。本作は出陣から半年が経った8月の届出であるためか、他の作品のような雪天ではない。また、この時点では戦いが終わっている戦場(彼方の熊本城)を村田新八が軍扇で指しているのも、この時期ならではといえる。



◀「鹿児島賊徒於城山血戦之図」

楊洲周延 明治11年1月14日届出

城山の戦い・西郷自決についての報道記事は多く、これを描いた錦絵も多い。

本作は戦いから4ヶ月が経った翌年1月の届出。この頃には西南戦争関連の報道も落ち着いていたが、それでも売れると版元・絵師は見込んだのであろう。

▶「鹿児島新聞 山鹿戦争之図」
安達銀光 明治10年4月5日届出

本頁の下2点は、ともに山鹿口の戦いの錦絵。絵師も版元も異なるが、届出日・画題は同じ、構図もほぼ共通する。あるいは銀光と年信が同じ歌川派の絵師であったことから、情報の共有があったとも考えられる。年信の師、大蘇芳年作にも同じ構図がある。

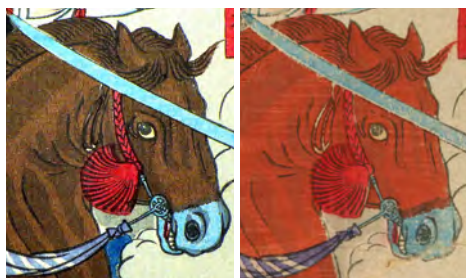


◀「鹿児島新聞内 賊兵激戦之図」

山崎年信 明治10年4月5日届出

山鹿口の戦い。本作に描かれたような場面の虚実是不明だが、熊山喜太郎等熊本城下の力士や吉田善門(吉田司家23世)が薩摩軍に参加した事実はある。

当時、政府のなかにあった相撲廃止論に対する反発があったのであろう。



▲「鹿兒島新聞之内 田原坂進撃之図」
梅堂国政 明治10年3月26日届出

錦絵は一杯（一回の摺り数）が約二百枚といわれる。彩色は一杯目の「初摺」では絵師が指定したが、二杯目以降の「後摺」では摺師の裁量に任されていた。そのため、同じ作品でも部分的に色が異なるものが見られる。西南戦争の錦絵には、こうした重版による色違いが多くあり、それほどに人気を博し売れたことが判る。

左の「鹿兒島新聞之内田原坂進撃之図」の馬のアップでは、版木が磨耗した木目が見られることから、左が後の摺りと判断できる。



▲「鹿兒島戦記」早川松山 明治10年3月12日届出 * 主な色の違い：西郷の鎧直垂の裏地・馬の腹帯・馬布



▲「鹿兒島の賊軍 熊本城激戦図」永島孟斎 明治10年4月13日届出 * 主な色の違い：橋の欄干、暈の縁、背後の山



▲「鹿兒島征討紀聞」楊洲周延 明治10年8月6日届出 * 主な色の違い：軍艦の船縁、女隊の着物（柄の有無）など



▲「鹿兒島再乱 西郷隆盛最期弑戦」梅堂国政 明治10年10月3日届出 * 主な色の違い：中央の薩摩兵の袴





▲「鹿児嶋女隊力戦ノ図」
楊州周延 明治10年4月12日届出

数多い女隊を描いた錦絵のなかでも初期の作である。詩書(説明文)に、中国・日本の故事にみる女武者のことで、戊辰戦争において会津藩子女の中野竹子が結成した婦女隊のことを述べたうえで、西南戦争では女隊が「胡蝶」のように美しく「激戦なす」としている。ただし「虚実は保証しがたし」とある。描かれている女武者は、各々の名前が駄洒落になっている。その他の女隊を扱った錦絵には、薩摩軍諸将の妻・妾が登場するものが多い。

西南戦争の錦絵は、現地を見ていない東京・大阪の絵師が新聞報道等をもとに、売らんがため、面白く誇張したり、創作したりした作品が多い。その代表が、度々登場する薩摩軍の女隊であろう。美人画風に描かれた薙刀姿の女武者が戦う場面はいかにも華やかで人気を博したとみられる。ただし創作とはいえ、三月二日付の郵便報知新聞などで女性兵士がいるとの風聞が報道され、また、鹿児島にて婦女子が政府高官宅を襲撃したという事実もある『丁丑乱概坤巻』。絵師たちは、僅かな情報をもとに作品をエンターテインメントとして昇華させていたともいえる。



▲「西郷戦争記」
長谷川貞信 明治10年8月7日届出

薩摩軍に包囲された熊本城との連絡をとるために気球が開発されたが、実際には使用されなかった。6月19日付の読売新聞、気球を「戦地にお廻しに成る」風聞ありとの報道を受けて描かれたものとみられる。

▶「鹿児嶋征討全記之内」
楊州周延 明治10年5月10日届出

吉次峠の戦いを描いた作で、薩摩軍が火牛の計を用いたとある。虚実は不明(恐らくは創作)。「峠」から木曾義仲の倶利伽羅峠の戦いや北条早雲の小田原攻めを連想したのと考えられる。



▲「鹿児嶋新聞 山鹿口戦之図」 安達銀光 明治10年3月26日届出

薩摩軍の将、前原一格(一角とも)は度々登場するが、架空の人物である。萩の乱の首魁として処刑された前原一誠の末弟で、乱の後潜伏し、薩摩軍に加わったという設定となっている。政府への不満、士族への同情の念が生んだキャラクターといえる。





▶「熊本城ノ將校 賊軍嘲弄之図」
梅堂国政 明治10年4月30日届出

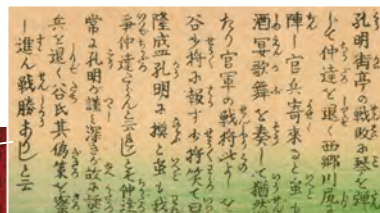
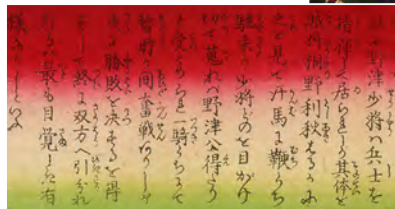
熊本城籠城戦で兵糧不足を悟られないよう、鎮台諸将が芸妓を挙げ供宴を催している。実際には、兵糧の枯渇は深刻で、供宴どころではなかった。



▶「鹿児島戦記」
楊洲周延 明治10年4月16日届出

4月9日付の東京曙新聞において植木の戦いでの桐野利秋と野津鎮雄少将との一騎打ちが報じられ、これを受けた作である。

詩書には、桐野が「汗馬に鞭うち馳来り少将どのを目がけ切て蒐れば野津公得たりと受けとめ」と、講談調で読者を引き込む表現が凝らされている。



◀「鹿児島戦記」
楊洲周延 明治10年3月届出

2月23日の木葉の戦いを描いた作で、薩摩軍が石油を撒き松明を投げ込んで火攻めをしたとある。そうした記録は無く、恐らくは創作であろう。

◀「西郷隆盛首実検之図」
山崎年信 明治10年10月16日届出

凱旋した有栖川宮・東伏見宮等が西郷の首実検をする様子を描いたもの。実際には、参軍山縣有朋の指示で首は現地に埋葬している。

◀「鹿児島戦記内 川尻酒宴図」
楊洲周延 明治10年8月1日届出

詩書には「孔明街亭の戦敗に琴を弾じて仲達を退く」に倣い、西郷が川尻の本陣において歌舞を奏したとある。三国志の故事をひき、エピソードを創作した作品である。

大判一枚の錦絵（縦36×横25cm前後・一銭六厘〜二銭）には、横長の
大判三枚続きとは違って肖像が描かれた作品が多い。女隊に加わった女
武者や政薩両軍の主な将などが見られる。

左に紹介する女武者は美人画の名手といわれた楊洲周延の作、谷干城
は、「大日本名將鑑」をヒットさせた大蘇芳年の弟子、水野年方の作である。
女武者の作品には縁模様があつて、現在のトレーディングカードのよ
うな設えにしてある。篠原国幹の錦絵は、通常とは異なり、ちりめん状
のしわがある紙を用いている。また、膠などを混ぜた墨で光沢を出す漆
絵の技法を部分的に用いたものも多い（漆絵部分を矢印で示す）。

こうした付加価値をつけた作品が多いのも大判一枚物の特徴といえる。



▲「鹿兒島勇婦傳」
楊洲周延（3点とも）



▲「西郷隆盛像」
小林清親



▲「文武高名伝」
水野年方



▲「鹿兒島英名競」
梅堂国政

アップ

地元出版の錦絵

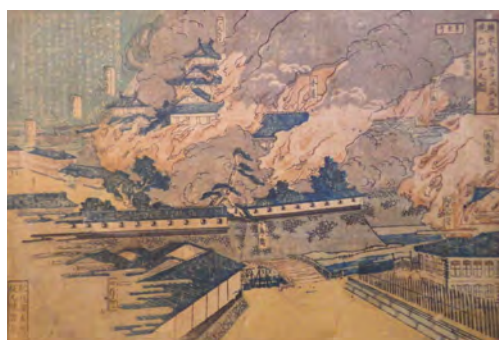
僅かではあるが、地元
熊本本の版元「焼出舎」が出
版した錦絵がある（三点を
確認）。

住所は「肥後隈庄町」（現
在の熊本市南区城南町）
で、二月十九日の城下焼

失により焼け出され、「隈庄町」に
移転したものと考えられる。

彩色は地味であるが、現場を見た
地元の絵師によるものであろう、忠
実な描写が認められる。

「熊本城天守井民家焼亡細見之図」
では建物の位置関係、「段山田端合
戦細見之図」では薩摩兵の姿や黒火
薬による砲煙の表現がそれで、地元
ならではの作品といえる。



▲「熊本城天守井民家焼亡細見之図」
栗山悌三 届出日末記載



▲「段山田端合戦細見之図」 栗山悌三 届出日末記載



▶ 薩摩隊士の姿
黒龍会 1909『西南記傳 中巻一』



『明治十年丁丑公論』において福沢諭吉が、西郷の蜂起を専制政治に対する自立した個人の抵抗として正当性を認めたように、識者のなかには西郷に対して同情的な意見が多かった。

庶民たちも、維新政府への不満も相俟って、賊将とはいいながら西郷に心を寄せていたのであろう。

錦絵には、西郷への敬慕や信仰、その暖かい人柄を描いた作品が見られる。



▲「流行星の珍説」 歌川国利三 届出日 明治10年8月20日

明治10年、火星の大接近があり、庶民の間で、その明るい星の光のなかに正装した西郷が見えるという噂が広まり大騒ぎとなった。これに便乗して、「西郷星」を描いた錦絵が何種類も売出された。

本作は、人々が西郷星に向かって身近な願いを唱えている様子が描かれている。



▲「西郷涅槃像」
永島孟斎 明治10年10月5日届出

釈迦涅槃図を模して、庶民や動物が集まって西郷の死を嘆き悲しむ様子を描いている。

詩書には、各々の嘆きの言葉が言文一致体*で記されている。牛「もうかなしくてかなしくってなりません」。

*二葉亭四迷『浮雲』も明治10年刊。



▲「西南ノ賊魁暴徒ノ輩…冥土黄泉江出発ノ途上閻羅王迎敬之図」
石塚寧斎 届出日 明治10年10月27日

閻魔大王や鬼たちが西郷を出迎える様子を描いた作品。

閻魔でさえ畏怖して亡者を改心させるよう誓う様は、人々の西郷への敬慕を反映したものといえる。



▲「鹿兒島聞記 川尻本営図」 山崎年信 明治10年4月19日届出

参戦を懇願する少年たちに、帰鹿して文武を学び、皇国に忠孝を尽くす大人になれと涙ながらに諭している。

西郷の暖かい人柄を描いた作品である。



▲「近世人物誌 やまと新聞附録第十七」
大蘇芳年 明治21年2月24日通信章許可

戦後10年の作。

西郷を不出生の豪傑と評価している。

明治十年四月七日付の朝野新聞に、早く知りたいから明日の新聞をくれという人がいた、という逸話が掲載されている。

それほどに人々の戦争への関心が高かったといえるが、どこか惚けて呑気でもある。

錦絵もエンターテインメントとして創作されたものが販売されており、庶民の多くは軍記物のように戦争を捉えていた節がある。

遠く離れた地では、実際の凄惨な戦いも対岸の火事ではなかったようだ（現在もその傾向はある）。

当時の世相を映し、戦争を面白おかしく風刺した作品を紹介する。



▲「東西英名鏡」明治10年8月2日届出
政薩両軍の将士を番付仕立てに紹介したもの。



雄松堂 1975『THE JAPAN PUNCH 1877-1878』
▲「Hunting a rat」『THE JAPAN PUNCH』1877年4月
横浜在留のイギリス特派員ワグマンが描いた風刺画。



▲「珍聞かんぶん 拾弔号」
明治10年5月11日届出
「いろは」譬えて茶化しながら
戦争を批判したもの。

「いぬもくわないうちわのけんか」



▲「西郷虎狼狸予暴摩茂痢奔損」（これら よぼう まもりほんぞん）
楊洲周延 明治10年10月23日届出

戦争を国の病（コレラ）だとして、これを踏みつける西郷を描く。守り札の体裁だが、本尊を「奔損」と茶化している。

▶「大日本内国勸業博覧会開場式之図」
楊洲周延 明治10年9月20日届出

西南戦争時の8～11月、上野公園で国内初の内国勸業博覧会が開催され、盛況を博した（9月7～13日の来場者は27,289人）。主催した大久保政府は、すでに戦後の時代－殖産興業の推進による近代化を見据えており、人々もそれを享受したのである。





未来に誇る、熊本のお話。
熊本遺産
KUMAMOTO HERITAGE
©榎木成香

【表紙】先鋒で突撃する様を描いた「田原坂の大戦争」（永島孟斎）をはじめ、警視抜刀隊を描いた錦絵は多い。
抜刀隊士イメージキャラクター窪田征巳郎も錦絵の中から出撃だ！
【裏表紙】『年刊田原坂』vol.1～4の表紙を飾った美少年兵イメージキャラクター山口雄吾。皆様の熱いご要望に応じて再登場！

熊本市田原坂西南戦争資料館



利用案内

- 開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで）
- 入館料
一般（高校生以上） 個人 300円 団体（20名以上） 240円
小・中学生 個人 100円 団体（20名以上） 80円
- 休館日 12月29日から翌年1月3日まで
ただし乳幼児、障害者手帳をお持ちの方、熊本市・鹿児島市・福岡市・北九州市に居住する65歳以上の方（証明できるものを提示）と同市内の小・中学生（名札か生徒手帳提示）等の入場は無料です。

お問い合わせ

熊本市文化財課植木分室

〒861-0195 熊本市北区植木町岩野238番地1
☎ 096-272-0551

熊本市田原坂西南戦争資料館

〒861-0163 熊本市北区植木町豊岡858番地1
☎ 096-272-4982

